

山の気象シンポジウム アブストラクト

日時 51年6月19日(土) 13時

場所 気象庁第1会議室

演題 (順不同)

1. 石鎚山の滝雲

大井 正一(東京理大)

75・11・1に石鎚山に登ったが、この正午頃土小屋では小雨であった。然し100mも登ると快晴で一面の雲海となり、面河溪谷に向けて雲が大河の如く流れ下っているのが見られた。この雲の瀑は1日の日没迄つづき、翌日も正午すぎ迄続いていた。又よく見ると、ここだけではなく、瓶ヶ森(かめがもり)付近の他の山の鞍部にも見られた。これは未だ見たこともない大規模なものであり、常にあると云う人と、初めて見たと云う人とが半々であった。天気図は地上は日本海高気圧と南方の台風の間、N風、850mbはCF後面のNE風、700mbは谷後面のNW風であり、瀬戸内海の水蒸気が侵入しているらしい。

2. 箱根の巨大なレンズ状雲

和田 光明(新日本海洋気象KK)

昭和48年2月6日、箱根外輪山に登山中、明星ヶ岳山頂付近より南東方向に、巨大なレンズ状雲がみられた。当日、この雲が現われた頃の、網代、三島、御殿場、河口湖、富士山の記録によると、網代、三島、御殿場では強い気圧の下降が有り、その他はそれほどでもない。ここで当時の気象状況を述べ、考察を行いたい。

3. 三宅島雄山の吊し雲について

湯山 生(三宅島測候所)

三宅島にかかる吊し雲は海上を吹走してくる比較的乱れの少ない安定した山岳波を表現している。1975年6月23日に現われた吊し雲について8ミリでコマどり撮影と2点観測によって雲の発生位置と生成について調査してみた。2点同時撮影はB点の地物との対称が不明確な所があって正確な位置計算は出来なかったが、おおよそ山頂から5,700m離れた所に出現している。吊し雲の発生先端ではジャンプ雲の生成が顕著に表現されている。

4. 冬富士山頂の遭難について

松永 敏郎, 田村 宏(国学院大学山岳部OB)

51年3月25日富士山頂において合宿中の本学山岳部員2名が高所性肺水腫症によって死亡した。この原因は荒天、特に低温が著しい強風や湿度と相関して気圧の変動

をおこし、人体の呼吸に不利な条件を作り上げたのではないかと思われその時の状況を説明する。

5. 山岳滞在と自然条件結合の制止

神山 恵三(東京農工大)

かつて、乗鞍山上において、山岳滞在中における末梢血管の脈波型の変動を調べた。

寒冷刺激に対する脈波型の変動は、山岳滞在初期に強く表われることがわかった。

生体は、山岳、海、森林など、日常生活環境から大きくかけはなれた環境へと「転地」とすると日常の自然条件結合が大きく変動し、これが生体に対して、一定の影響を持つことを考えれば、この実験結果は、そのことの一例を示すものであろう。

6. 山の生態系

本谷 勲(東京農工大)

山で植物の垂直分布帯が認められることがある。垂直分布は生態分布のひとつであり、系統的な分布(地理分布)とは別の、環境への適応の結果(生活型)によるものである。植物の環境のうち、気候は最も大きな影響をおよぼすので、垂直分布は山の気候のすぐれた表現とみなすことができる。いっぽう植物の存在そのものは気象に影響をおよぼす。動物は食物と生活場所が植物に強く結びついているため、植物を介して気候と結びつく面がある。

7. 山地生態系へのインパクト

三寺 光雄(気象研究所)

人工構造物で密集している都市は、自然環境にも、一定の影響を与えている。特に、熱的な影響は大きい。樹林でおおわれている山地を開発する場合、自然環境はどのように変化するか、そうしたことを予測する資料は、ほとんどない。今回は、緑地の表面温度特性について報告したい。

8. 森林地帯の水収支

当舎万寿夫(気象研究所)

山林地帯における雨水の配分問題をとりあつかっている。実験地としては奥多摩にあるハビロ沢の流域(面積120ヘクタール)を選んでいて、この流域内での降雨量、樹木の阻水量、樹種による阻止効果、表面流出水量、樹木からの蒸発散量についての計算した結果が出してある。実験観測によると表面流出水は雨量の少ないと

きに小さく、50~60 mm までは増加が僅かであるが、この値をこす雨量になると急増している。

9. 奥多摩における自然保護運動

鈴木 貫太 (多摩川上流の自然を守る会)

48年8月天祖山開発の許可が出て、同地区の開発が行われた。この結果生じた奥多摩の荒廃、特に河川への土砂流出と災害について述べるとともに地域開発と環境問題について自然保護の立場から説明したい。

10. 中部・東北山岳域の雪窟地形と植生について

小岩 清水 (専修大学付属高校)

中部・東北の雪窟地形と植生について調査を行った。その結果、かつての寒冷気候の卓越時代に拡大した雪窟のすべては、現在その活動が微弱となり、裸地であったところは周辺の植物が拡大侵入し被覆が進み、融雪水の流路や雪窟礫地であったところは埋没しつつある。また前年までの各域の環境とも密接な関連が認められたので報告したい。

第18期第15回常任理事会議事録

日時 昭和51年3月15日(月) 14.00~16.30

場所 気象庁観測部会議室

出席者 磯野, 小平, 浅井, 朝倉, 大井, 奥田, 高橋, 丸山, 各常任理事, 川村理事

報告

[庶務]

- 3月3日(財)日産科学振興財団から、推薦学術研究の助成決定通知ならびに研究助成金贈呈式の案内がきた。(助成金受領代表研究者 石川晴治会員, 贈呈式3月24日, 於銀座東急ホテル)
- 3月12日, 当学会中部支部長から昭和51年度秋季全国大会の会場等について通知がきた。(10月21日~23日, 於愛知県産業貿易館)

[学術用語]

既刊された用語集について各方面から種々の訂正すべき点について意見が出されている。これらをまとめて会員の意見を求めたい。また、解説のための小辞典も考慮している。

議題

1. 総会提出議題について

- (1) 学会賞, 藤原賞の賞金の増額について

1件5万円を7万円にする。

- (2) 山本義一会員を名誉会員に推薦することについて

長年理事としてまた理事長として学会の維持運営に努められ、かつ教育者として気象教育の普及発展に尽力された功績により名誉会員に推薦したい。

2. 夏季大学運営の申送り事項について

気象学の普及に関する新しい委員会を作ること。

3. 事務局職員について

経理担当の梁田光枝夫人が都合により3月末日で辞職、代りに佐藤太氏を4月1日から正式に採用することを了承。ただし梁田夫人は、会計監査が4月に行われるため1ヵ月延ばすことを了承。

承認事項 堀江安男ほか15名の入会を承認